

京都秋期福音特別集会（2）

天国人の実存 ——イエスの天国——

——マタイ伝第5、8章——

1967年11月4日

小池辰雄

人生は意気 汝らは世の光 神秘の世界 キリストの裏付け 海の塩 キリストの火を持つ
愛の復讐 霊体として復活 本願の効力 絶対者と再結 父の全きがごとく全かれ 信行一如
終末的現在としての天国 超道徳の世界 「からの自由」と「への自由」 ナポレオン最後の述
懐 私を背負ってくれよ 御霊の神癒的な徴 天国人の実存の両面 道徳的実存 二つなき道

【マタイ5】

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後は
用なし、外にすてられ人に踏まるるのみ。14 汝らは世の光なり、山の上にあ
る町は隠るることなし。

【マタイ8】

2 視よ、一人の癩病人みもとに來り、拜して言う『主よ、御意ならば、我を
潔くなし給うを得ん』³ イエス手をのべ、彼につけて『わが意なり、潔くなれ』
と言ひ給えば、癩病ただちに潔れり。

● 人生は意気

キエルケゴールが『アウゲンブリック』（瞬間）という本の中で、

「我々がまことにキリスト者であり、キリスト教会とキリスト教的世界とが正しいとす
れば、とりもなおさず新約聖書はもはやキリスト者の道標ではなく、また道標たりえ
ない。ところが、かようなキリスト教会とキリスト教的世界とは、ことごとく人間の
欺瞞的行為である。これに反して、新約聖書は全く普遍的な変わらないキリスト者の
手引きである。キリスト者にとっては新約聖書に記されたとおりのことがこの世にお
いても常に行なわれる。」

と言っている。あの『アウゲンブリック』という本は非常に痛快な本であります。

「今のキリスト教が本当なら、新約聖書のキリスト教は神話だ。新約聖書のキリス
ト教が本当なら、今のキリスト教はうそものだ」

というわけでありまして、これくらいズバリと言っている気持ちのいい言葉です。まああな
がち過言でもない。もちろん、例外的な人たちもありますけれども。そういうようにキエ



ルケゴールは当時のキリスト教会とキリスト教的世界と両方をダメだと言ったわけですが、黒か白かという。だいたい似たようなことが今のキリスト教会およびキリスト教的世界について言えるのではないか。だいたいキエルケゴールの言っていることは今も当てはまるのではないかと思われるわけです。それくらいとにかく、時代がたつにつれて、次元のズレがきてしまっている。イエスが、

「末の世に信を見んや」

と言われた。本当の信仰があるだろうか。キリストの言葉を見てみると、実に激しい言葉であります。誰かこれに堪え得んやという言葉をズバリズバリ言いかけて、そして、なにも「こういう場合には」なんて条件付けをしないで断言命題であります。

真理というものは、なにかだんだん三段論法にならなければ結論が出てこないようなのは、それは生命的真理とはちがう。生命的な真理は、聖書のキリストの言葉の一言一言に全宇宙が引つかかっているような言葉です。

そういうように、福音の世界はズバリとくるので、どうぞ、この一瞬をこの一夜を——

「二日は千年のごとく、千年は一日のごとし」

というように——永遠の瞬間として皆さんはつかまえて、ただ「あの時はよかった」なんていう思い出だけではないかん。それはお土産話ではない。皆さんの中にひとつのなにか生命が入って、そしてそれが展開していく。

「この生命を何をもって消すことができるか」

というようなことでもってひとつ行つてください。もう人生は意気ですからね——

「人生、意気に感ず」

なんていうけれども。合気道なんていうけれども——この道場は靈的合気道だから。なにか生ぬるいのはよしましょう。

「われ汝を吐き出す」

と。熱くもなく冷たくもないような生ぬるいものは吐き出すと、天上のキリストがパトモスでヨハネに黙示録のところまで語っておられる。

● 汝らは世の光

第一回は、「天国人の素質」というんですが、今度は「天国人の実存」と題しまして進みたいと思います。とにかく、靈的に生まれ変わって、あの山上の垂訓の、大告白の序論のところでは言われたような、そういう人間に質的に私たちはされている。そのようなことにだんだん成っていく。まあなんと有り難いことかと思うわけです。ただそれを有り難がって、ただじつとしていたって、それはダメです。それが本当になつてくるというと、だんだんにか動きだす。その動き出すことが実存であります。「エクジステンツ」(実存)というの、「投げいいでる」ことですから。イエスは、天界のロゴス・キリストが地上に投げ出



た「エクジステンツ」です。だから、私は「イエスの実存」と題したドイツ語の教科書をつくった。

そこで私たちがどうしてもぶつからなくてはならないのは、あの山上の垂訓の今度は本論のところであります。本論のところに進んで行きます。マタイ伝5章13節、

「¹³ 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後は用なし、外にすてられ人に踏まるるのみ。¹⁴ 汝らは世の光なり、山の上にある町は隠るることなし。」(マタイ5・13、14)

ここに著しい言葉がある。

「汝らは世の光である」

ということ、

「汝らは地の塩である」

という言葉です。「世の」というのは「闇の世の」ということ。これは

「闇の世の光」

ということ。ヨハネ伝で「世」といえば、これは「闇の世、罪の世」のことをいう。この救い難き世。どうにもならんですよ、世界は。全く救い難い。全世界が本当に軍備を全部撤廃して神さまの前に平伏せば、それは別ですけれども。まあ考えられない。なんの can のいいにしても、驚くべき、恐るべき兵器でもって世界中がどうかなくなってしまふようなことがもはやお伽話でなくなっているような危機的存在です。この20世紀後半は危機的な世界であります。危機を孕んでいる世界です。そういう危険千萬な闇の世の光であると。もう言うまでもなく、キリストそのものがここに言うところの光です。キリストが光。

「光が世に來たが、世はこれを知らなかった。世はこれに勝てなかった」

という。聖書の言葉は、受けるときに必ず祈り、心をもつて受けなければいけません。祈り心というのは、さつきから申し上げているとおり、自分を投げ入れている心です。自分を投げ入れている心でこれに接しないと、いつまでたっても本ものにならない。

「キリストが光である」

といったら、このキリストの光の中に自分を本当に投げ入れる冥想的な祈りの中に入らないとね。

● 神秘の世界

私はこの一年間少しドイツのミステイカー(神秘家)を多少勉強したわけですが、このミステイカーにあるところの大事な要素を——ルターはある程度受けとってますけれども——だんだんこれが排除されてしまつて、あれはどうも危険だというわけで、ミステイックなものを排除する。けれども、「神秘」という「ミステリオン」(奥義)という言葉はちゃんと聖書に出ている。ヨハネにしたつてパウロにしたつてこの福音的なミステリオンの世界



に深く入っている。それを忘れて文字面の解釈をしたり研究したりして何になるかと。

「おまえたちどこを読んでいるのか」

とパウロに言われてしまう。彼らはその世界に深く入っている。私は水をこうやって飲んでいるでしょ。

「水はH₂Oであります」

なんて言つて、私は喉の渇きがおさまりますか。おさまらない。いくら水はH₂Oなんてわかつたつて、これはやっぱり飲まなくては。飲んで味わつて、自分の身体の中に入つて血となり肉となることが、これが神秘の世界なんです。生命を受けとる世界です。我々の魂がこの聖書の文字という暗号を通して、その中からくるところの、

「わが言は意味ではないよ。霊である、生命である」

とキリストが言われたら、なぜ、これを霊として生命として受けとらないか。そこにこの現代キリスト教がもう躓いている。始めつから躓いている。頭がいいのわるいのと、そんなことは問題じゃない。全存在でもつて受けとることが大事です。だから、地上のいかなるよきものもこの神の真理は受けとれない。

そういうことで、深くミステイカーはその世界に入つていた。ゾイゼなんていうやつも、エックハルトなんていうやつも凄いですよね。深く入つていたところに多少、表現の仕方や何かにかなり大胆なことを言うものだから、福音的な角度からは異端視されてしまったけれども。それから何と云つたつて、十字架のことはルターさんが新しくパウロさんを受けとりましたから。そこにひとつの限界はありますけれども、そうかといつて、全部がまぢがつているのでは絶対にない。

どうぞ、そういうことで、皆さんは、キリストの十字架の贖いを――頭じゃないですよ、理解ではない――本当に贖われたものとなつて、その中に入れば、その先の神秘の世界は遠慮なく突き進むことです。遠慮なく聖霊の深い世界に入る。十字架の裏付けのない霊なんていつたつて、それはダメですよ。贖罪の裏付けのある世界にくるところの霊はまぢがないくキリストの霊ですから。恐れなく間違いなく大胆率直にグングン深く入つていくことです。そして、本当にこの霊生を、霊的な生命を身につけること。いつ死んでも、

「アーメン・ハレルヤー！」

という人になることです。

●キリストの裏付け

それが、キリストが光であるとしたらば、本当に自分がその光になること。

「汝らは世の光なり」

ということとは、キリストがちゃんと裏付けをもつて言つてらつしやる。私たちが、

「何々すべし、すべからず」



とか言われたってね、それは手放しではないですよ。キリストは、無いものに向かつて、「有る、できる」なんて——「こうやればこうだ」なんて言わないで——勝手にキリストの方から決めつけてものを言っている。なぜ決めつけているかというところ、キリストが、

「私がおまえをそうさせている。私がおまえの中でそうなるんだ」

と。いちいちそんなことを仰らないけれども、そういう言葉で語っている。福音書の読み方が全然まちがっている。キリストの裏付けのもとに、キリストが請け合つてものを言っているんです。キリストの責任において、キリストの担いにおいて、キリストの恵みにおいて、語っていらつしやる。

「そうです。私はもう手放しでは、あなたの言にとっても堪えません。しかしだから

こそ、私はあなたの中に入ります。どうぞ、そう成つてください」

というのが、この福音の喜びの音信です。そうでなくて、どこに喜びがあるか。

「汝らは世の光なり。私がおまえの中に入って、光となるぞ」

「はい、どうぞ、お成りください」

と。この他に何がありますか。「それでも私はダメです」なんて、何を言っているか。

「ダメだからこそ、私が入っていくんだぞ」

と。それがキリストの恩寵の言でありますから。平伏していただく。

「汝は世の光なり」

というのは、力強い恩寵の言である。御霊のキリストが入ってくれば、これはもう光である。

「はい、あなたの光であります。どうぞ、いよいよ光つてください」

ということ。

いつかも言ったでしょ。法然は、菩提の境地、澄み渡つた月のごとき——月が水の中に映っている姿が菩提であるとする、そのような姿になんとかなりたい。なれない。どうしても、その姿は、月を取ろうと思つてもとれない。なんとかして煩惱を去ろうと思つても、私が立てば陰がある。形の陰のごとく、煩惱はこれを去ることができない。とうとう弥陀の本願に依りすがつたのが

「南無阿弥陀仏」

であります。

ところが、私たちはこのダメなやつの中に、この光が、聖霊が入ってきて、

「汝は世の光なり」

「はい」

と言う。入ってきたんだから、「はい」と言う。私は自分で光になんかになれやしないんだから、「はい」と言う。そうしたらば——横に余計な別な光があるところちに陰がさす。煩惱みたいな陰がさす——しかし、ここに光がきて、こんな世の中の光なんて問題にならない。これがもの凄い光を発しますから、陰なんかなくなってしまう。陰なんかない。



私は陰のない人です。あなた方も陰がない。陰はあれども無きにひとしい。陰の無き存在になつてしまふ。贖われたる私というものは陰の無い人である。手放しの私は陰だらけでしょう。しかしながら、キリストに在る私は陰のない人で、皆さん一人びとりがそうである。だから、この陰がなくなつてしまふ。

月影は映る。どうしてもこれを取ろうとしたつてとれない。そうしたら、我々自身が――聖霊はまた水といわれる。水といわれ火といわれる――即ち、聖霊が入つて、私が水のごとき人になる。水のごとき人となつたらば、月影は宿らざらんと欲すといえどもあたわず。おのずから宿つてしまふ。即ちこの、

「心の清き者は幸いなり。神を見ん」

という姿になるわけです。

こういう素晴らしい事態が福音である。キリストという驚くべきものを宿すというと、もう何でもかんでもが見えてくる。そして、一切を包摂してしまふ。なにも私は仏教とキリスト教をごちゃ混ぜにしているのではないですよ。福音が素晴らしいから、仏教の素晴らしいものをちゃんと包摂して、

「ああそうです。また、その足りないところはこういうわけです」

というようなわけですね。何でもいただいたものは全部これよからざるなし。全部消化されてしまふ。一切のものを包摂するような驚くべきことになっていく。もちろん、私たちは有限的な人間ですから、全部が能うなんて言つてませんよ。質的にそういうことになってくる。

●海の塩

今度は、塩です。「地の塩」とキリストは仰つた。ちよつと訂正したつてわるくはないと思ふけれども――

「いいことに気がついた」

なんてイエスさまは仰つてくださる――私たちは、海の塩です。海水の塩。地の塩というのはどこかにしかないよね、岩塩なんていうのは。けれども、海の塩というのは、塩はどこにありますかというと思えない。塩は見えないけれども、どこの海の水をなめてみても塩辛い。即ち、塩が溶けているすがた。塩がその中に溶けて、どんな汚いものが流れてこようが、全部これを浄化してしまふ。塩は、

「あいつは塩辛いやつだ」

と言つてなにか固い塩辛さではダメですよ。それは姿が見えない。けれども、至るところに遍在して、そして全てを浄化してしまふような、そういう塩水の塩。海水の塩のごとき人になる。

光だつてそうですよ。光は、あるときには――和光同仁なんていう言葉があるとおり――



―やわらかな光となつて、

「ああいいなあ、今日の秋の陽は^ひ」

なんてなね。夏の烈々たる陽もまたいいし、秋の和やかな陽もいい。秋の日差しを和光という。とにかく、自在なものです。水にしたところで、みんなそうです。空気は何でもないね、こんな空気は。だけれども、こいつがひとたび風を吹き出して嵐となれば、何でも吹き飛ばしてしまう。水もこんな器に入っているものはちつとも恐くないけれども、さあ大洪水になってきて、日本なんかはしょっちゅうそれで大損害を被る。そういう水の力はその凄い力を持つているかというところ、まるで無力の相である。空気も水もみんなそうです。千変万化、自由自在です。

そういうようなのが、この聖霊を受けとつた人というものは、ある一定の概念で限定することができない。祈りの世界もそうですよ。沈黙していて、沈黙の雄叫びというのがあ。また、激しい祈りもある。遠慮はいらん。神さまは、遠慮したつてしようがないですよ、ちゃんと分かっているんだから。とにかく、あるところを突破するときには、もう恥も外聞も体裁もありません。そこへ行かないと本当の自由の世界に入れないんです。なにも私は、ある激しいことを必ず体験しろと言っているのではないけれども。

人によって、

「私はそんな大きな声で祈れません」

と。ああ結構です。恋人に囁くような、そういう声だつていい。それから、黙っていて、

「先生、もう祈りました」

と。ああ結構です。何でもいいですから。しかし、そこに本当に全身を投じたまことさえあればいい。嵐のごとく、またそよ風のごとく、無風のごとく、祈りの姿もさまざまで結構です。それに対して嵐となれば自分が嵐となる、無風となれば無風となる。そういう自在な魂にならなくては。

●キリストの火を持つ

宮本武蔵とかああいう連中が剣で強いのは、そうなんですよ、どこからどうしようが、八方破れでちつとも隙がないというやつ。そういう姿が本当の御霊の世界です。自由というなら、本当にそういうのが自由という。なにか自分の気儘勝手な自由では絶対がない。そんなものは不自由で自分というものにとらわれている。

そういうのが、この光と塩。キリストがそのような溶けた塩となつてくる。パリサイ人とおよそ違うです、キリストという塩は。「俺は」と言つて頑張っているような、そういうのはみんなぶつ倒されてしまう。そんなものはくたびれて、終いにはダメになってしまう。

そういう塩や光ということ。御霊はどのような海水の塩のごとく、また自在にきている光のごとく。この光は消えない。電気や何かはどんなにあつたつて、それは消えるときに



は消える。私たちの中に灯った聖霊の光は消えない。不滅の灯火である。どんな嵐がきたって消えない。

もうそういうようなことになりましたら、もういいですよ、本当に。そして本当に楽なんです。だから、福音でなくて「楽音」と言つたつていい。音楽ではない。私たちは楽音の音信を受けとつて――今まで肩が凝つていたが、もう私は知らないうちに凝らない人間になりましたと――楽になつてください。楽といひましても、ただ安楽椅子に坐つているような、そんな楽さではダメですよ。底力のある本当の楽さです。

浅間山は火山ですから、火が燃えている。普段はじつとして静かな煙を吐いてるけれども、しかし、ひとたび火柱を上げて爆発すると素晴らしいものです。普段は静かだが、一朝事あれば爆発することのできるような。そういう火を私たちが腹の中に、存在の奥にキリストの火を持つ。

だいたい、本当の人間というのはみんな火のごとき性格をいただいています。それは聖霊がくればそうなる。ベートーベンにしろ、ロダンにしろ、とにかく、賀川豊彦、内村鑑三なんてのもみんな火みたいな人です。火みたいな人になれと言っているのではないが。静かです。静かでもいいけれども、あんな静かな人がもの凄いい火を持つているなど。

ヒルティなんかさうですよ。私は、若い人にはヒルティを読みなさいと言います。ヒルティの信仰は実に健全ですから。しかし、あの非常に均整のとれた人でありながら、実はもの凄いい火をやつぱり持つていて、時々ヒルティの言葉の中に、ヒルティがこんなことを言うかというような激しい言葉がある。

女の方でも男の人でも、生れつきの性格がどうであろうと、上からきているものはみなそういうようなものでありますから。どんな嵐がきても、もう消えませんが。そういう火を灯してなら、私の集会からいくら出て行つたつていいんだよね。しかし、その火を灯きないうちに、なんののかんと言つて集会を出て行くやつはみんなダメになつていく。「やつは」なんて言つてはわるいけれども。どうぞ、しかし、その人たちがどこかで行き詰まつて、

「ああこれはしまった」

と言つて思い返して、もう一遍火を吹き直してくれれば、本当にうれしい。だから、私は時々、そういう人たちのために本当に深く祈ります。

●愛の復讐

それから、キリストはモーセの十誡をあげまして、たとえば、

「殺すなかれとあるけれども、憎めば、そいつは殺したんだ」

と、マタイ伝5章21節から。

「色情をもつて女を見たやつは姦淫したやつだ」

と、5章27節。



「いい加減な気持で仕えるものではないぞ」というのは5章33節以下。それから、

「目には目を、歯には歯をというが……」

と言って、5章38節以下。ユダヤ人のこの、

「目には目を、歯には歯を、生命には生命を」

という復讐観念は、ユダヤ人は非常に強いわけです。しかし、キリストの交換は私たちの罪に対して「罪には罪を」ではなかった。罪に対して義をもって応えてくれた。

これは人の生命をとった。キリストの生命を私たちは十字架にかけて取ったではないですか。神の子を殺したではないですか。私もあそこにいたら、やっぱりそっちの方の味方だったでしょう。悪いやつです。今、キリストが現れたら、キリスト教会が寄ってたかってイエスをまた十字架にかけるでしょう。この新興宗教の怪しげな野郎だなんて言ってるね。

そういうように、我々はキリストの生命を取りながら、キリストは私たちの生命を取らずに、逆に生命を与えてくださった。マイナスの行為に対してプラスをもって私たちに復讐してくださった。キリストの復讐は愛の復讐である。これが最高の勝利なんです。どのような迫害を受けようが、相手を救いあげていく、この人は本当の勝利者である。

今、「天国人の実存」といいましたが、その「目には目を、歯には歯を、生命には生命を」というところで私はそのことに気がついた。即ち、イエス・キリストは、私たちがキリストを殺したにもかかわらず、十字架につけたにもかかわらず、

「いや、おまえたちがつけたのではない。私がおまえたちのために棄てたんだ」

と言って、私たちの罪を問わない。問わないで、黙ってしよってしまった。そして、

「彼らを赦してやってください」

と。「赦してやって」どころではない。罪を赦されただけではない。

「生命を与えてやりましょう」

という。

「私は甦るが、この甦りの生命をやるぞ」

と。

●霊体として復活

「甦る」というのはただもとの息を吹き返したのではないですよ。霊体として現れたので、地上でイエスが実存していたその身体以上の霊的なからだ——パウロがコリント前書15章で言っている——この霊的なからだをもってキリストは生きていた。戸が閉じているのに入ってきて、変化かと思つて弟子たちが驚いたから、

「騒ぐな、驚くな。そこに何か食べるものがあったら食べるぞ」

と。焼き魚があったから、キリストはそれを食べた。ルカ伝のおしまいの方に書いてある。



だいたい、普通の神学者も牧師さんもこれを本当としない。私は、あるがままに本当といえます。その通りだと。そういう驚くべき生命、霊体をもって現れて自由なキリストであります。

「この生命をおまえたちにやるぞ」

と。ただ魂が救われたくらいのはなしではない。全存在的に、私たちがどこで倒れようが、どんなにこの肉体が腐ってしまつて跡形もなかるうが、虫に食われようが、

「おまえの中には新しい霊体が与えられて、魂が霊体を着せられて、本当に霊体として復活するぞ」

と。パウロがコリント前書15章で約束することが——事実キリストが証明したから、あとからパウロが言つたけれども——その事態の、少なくとも私は絶対にその信仰であります。

それでなければ、終末的な希望なんでものは空望にすぎない。世界がひっくり返ろうが、水素爆弾がやつてこようが、そんなことで死にはしないぞと言うだけの、この福音の力強い救いの世界。単なる悟りではない。イエス・キリストだけがこのことをなした。イエス・キリストだけがこのことの実証者であつた、この福音です。

「我を受けとる者は死ぬとも生きるぞ」

と、そういう福音の中に私たちは入れられてありますので。

●本願の効力

モーセの十誡に

「何々するなかれ」

と書いてあるが、もうひとつそれをえぐつて、キリストはもつと奥の世界を言つたから、道徳というならば、キリストの道徳くらい森厳な道徳はない。モーセの律法以上の律法で、律法の根本精神を——「聖なる律法」とパウロが言つたその根本精神を——キリストは受けとつている。

そうして、「かくあれ」と言つたつて、我々はあれませんか。それでも、

「お前たちをあらしめるぞ」

という。

いつかも言つたでしょ。太陽は地球のあなたに在る。地球はここに在るけれども、地球はただ在るのではない。太陽が在ることが地球を在らしめている。これを引つ張り回している。この光熱によつてこれをみんな生かしている。生きとし生けるものみな太陽のお蔭であります。そういうように、有ることが在らしめる在り方が本当の「ザイン」である。本当の実存という。この実存的な、

「有ることが他をして在らしめている」

のが恵みの在り方。キリストがそのような在り方で私たちに在る。神さまはそのような在



り方で私たちに在りたもう。これが本願の効力ということですよ。
 そのようにして私たちは在らしめられている。どんなに神さまを信じなからうが何であらうが、事実どんな野郎もみんな在らしめられている。無神論なんて何を戯言たわごとを言っているかと。

●絶対者と再結

まあ気の毒ですね、本当に。どういうことですかね、今の大方の若い人たちは。「宗教」という言葉が非常に躓きになっている。「宗教」というのはもともとラテン語で「レリガーレ」「再び結ぶ」という字である。「再結」というので、宗教でも何でもない。

「再結せよ。絶対者と再び結び返しをしろ」

というのが宗教という字ですよ。結び返しをしないで、この糸が切れていて、なにをうそぶいたって、みんなそれは亡びへの道である。

こういう話を聞いて、本当に「そうだつ！」と言って――まあ叫ばなくたっていいけれども――私の講演が終わったら私にしがみつような青年が一人でもいるかと思えば、一人もない。情けないね、全く。あなた方は本当に生命らしい生命を欲しくありませんか。本当に生命らしい生命を持つ。孔子さんが、

「千万人といえども我ゆかん」

と言ったけれども、全く孔子さんに決して劣らずに、「千万人といえども我ゆかん」と言える。私みたいな生れつき臆病者がどうしてこういうことになったか。私みたいなやつがとにかくこういうことになった。生れつき私が強情で強い野郎なら、それは

「あれは生れつきなかなか意地張りの強い野郎だから、そうなるのも仕方がない」

とって判断されるかもしれないが、私みたいな弱虫の骨頂が――中学のときに学芸会で演壇に立たされると足が震えて困ってしまった。そういう弱虫なんだ――そういう弱虫がこういうことになったというのは、ダメなやつがなった。内村鑑三先生がいつか書いたですよ。

「私みたいのが救われたんだから、万人が救われる」

と、内村先生が言った。謙遜でも何でも無い。内村先生というのは自分の矛盾にも苦しんだ人ですよ。そういうことでありまして、どうぞ、

「何がどうなっても、運命環境、何がどうなっても、もういいです」

というものを、皆さん、持とうではないですか。そうしたらもう楽しくてしょうがない。

●父の全きがごとく全かれ

それで、キリストはそのようにして、モーセの十誡の根本精神を言いながら、私たちにそれを突きつけながら、



「おまえたちはダメじゃないか」
と言ったのではない。

「おまえたちはそのようになる」
と。そして、最後には何と言ったかという、

「汝ら、父の全きがごとく全かれ」

と。これはキリストの私たちに對する最高の要求、最大の要求です。「父の全きがごとく全かれ」という。このダメな罪びとにイエスは水を割らずに、「汝ら、父の全きがごとく全かれ」と。まあなんとという人かと思うね、その素晴らしきは。ところが、イエス・キリストはちつとも全き人では実はなかった。

「私は何もできない。なんぞ、私を善きと言うか」

と。この自分が無善であり、無義であり、無教であり、無言であり、無為である。何もできない。そういうダメの骨頂と自分を決めつけて、

「もう、神さま、ただあなただけです」

と言って、全托していたキリストが父の中に入ってしまったから、父の全さが彼の完全になってしまった、イエスは父の全さになってしまったから、

「我と父とは一つなり」

と言う。

「我を見し者は父を見しなり」

と。父の完全性が現れている。

● 信行一如

だから私たちは、

「私を見た者はキリストを見たのだよ」

と、その根源の姿においては言えるんです。手放しの人間小池はとんでもないやつかもしれない。けれども、私の中にあるものはキリストである。だから、ペテロも、

「我を視よ」

と言った。ヨハネもそう言った。パウロもそうです。みな、「我を視よ」と言ったのは、

「わがうちなるキリストを視よ」

ということですよ。跛者に、

「我には金銀はない。私にあるものをおまえに与える。イエスの名によって立て！」

と言ったら、生れつきの跛者が立ってしまったではないですか。

道徳的な実存の世界、その究極の御霊は完全性を持つた霊であります。この完全性を持つた霊をいただいたら、即ち、私たちは、父の全きがごとく全きものがあるんです。根源に



おいて全さがきている。ただ、現実の姿は、私はまだ二日月か三日月みたいなものです。けれども、やがてこれは天上に行つて満月になる。皆さんも一人ひとり満月になる。そういうようなぐあいには、この三日月において、だんだん増大していくところの月の影、これが皆さんの御霊を宿している影です。これは三日月でありながら既に満月。未完成の完成という姿。即ち、量ではない。質であります。

生け花は、それがどんな貧弱な生け花でも生きた花である。造花であつたら、それはどんなに立派であつても生命は持たない。生きた花はとにかくそこに生命がある。キリストを持っているものは、どんなに不完全でありましても、そこに生命を持っている。その生命的な、その破れ衣の中にあるところ完全性というものを、これを持っている人で私はなかったら、クリスチャンなんていつたつて、つまらないですよ。

「父の全きがごとく全かれ」

は、ルカ伝では、

「父の慈悲なるがごとく慈悲なれ」

という。この完全性は、道德の全きは即ち愛である。

「愛は律法の全きなり」

とパウロが言っているとおりに。だから、この

「全き」

というマタイ伝の言葉と、ルカ伝の

「慈悲なるがごとく」

と

「愛」

という言葉は実は一つの言葉であります。そして、モーセの十誡をその一番本質において靈的にこれを満たしてしまう。

どんなに私たちは不完全であつても、そこに完全性をもって、その行為は、信仰と行為は一如であります。信仰、一如。信仰と行為をあとから辻褃を合わせるのではない。信が最も内的な行為である。信ずるとは「全身を投げ入れる」ことです。受ける「こと」です。この行為が本当であれば、この行為は自然に派生してくる。それでも人間はダメだから、ここにズレがきている。いいよ、ズレがきたって、そんなことは。けれども、ズレがきてても、そのズレの中に現れているその不完全な事態そのものは本ものかと。それがどんなによさそうにみえても、ウソものではダメなんです。どんなにそれが惨憺たる姿でも本ものならいい。そういう生き方をなぜしないか。もう今までの因習的な概念を突き破らなければダメですよ。



●終末的現在としての天国

そうして、この私たちにおける今、現実には聖霊を宿しているところの天国人は――天国人というのは今、天国の人ではないですよ――天国的な既に、

「天国は、神の国は汝らのうちにあり」

という。「うち」は中でもあるし、間でもあるんですが。この我らのうちにある。こうやって集まっている中に天国は来ているんだと。

あのおもしろい道歌があったでしょ。

「極楽は東にあらず西になし来た道さがせみんな身にあり」

という。極楽はみんな身体のうちにある。西方浄土ではないよと。天国は汝らのうちにある。現実には私たちが天国人と現実、にされている。現在のである。現在の素質をいただいて、そしてそれが実存として展開している。これはみんな現在の事実です。

天国の事態は終末的な事態ですから、最後の神の国というものはもちろん、仮天国がある。

「汝、われと共にパラダイスに在る」

というのは仮天国です。けれども、歴史の終りにくるのは今度は本天国。本天国の世界に向かつて、終末的な天国に向かつて今、終末的現在としての天国、これを私たちがいただいているわけです。聖霊を宿している人にはそれが来ている。観念信仰では来ていない。かのごとくに見えるだけのものはなし。そんなみかけ上ではしょうがないですよ、いつまでたっても。魂の世界はごまかしがきかないですから。

●超道德の世界

そういう現実において、私たちにおいてまず何が現象するか。今、私たちは第二回でもつて、「天国人の実存」としてまず道德的な面、道德的な生活、この一般社会において我々がクリスチャンとして道德的実存として、もはや道德なんていう言葉で表すことのできない妙界に入るわけだ。かたつ苦しうそんなことを言う必要がない。しかしながら、いくら「道德、道德」と言ったつて、どうにもならないことはもうさんざん試験済みなんだ、私たちは。それだから、もうそいつには行き詰まってしまうから、超道德の世界がはじめて道德を満たすんだ。これはルターが言っているとおり。

それで、モーセの十誡の根本精神が、たとえば、

「汝、殺すなかれ」

という。あれは実は本当の意味は、

「汝は殺人しない」

と、私ははつきりそう読みます。あれはヘブライ語で実はそういう「なかれ」ではなくて、「殺人しない」という断定から、

「だから殺人はしてはいかんよ」



と派生的にくるだけで、本当は「殺人はしない」といつて読んでよろしい。なんとなれば、
「そは我は汝の神エホバなり」
と書いてある。

「私はおまえの神エホバだから、おまえは殺人なんかしようとしたってできないね」
というのが、あの律法の根本精神だと申し上げているとおりです。そのようにキリストの福音は、

「私がおまえの生命だから、私が何を言おうが、どんな激しいことを言おうが、心配はいらんよ」

というのが福音の世界です。だから実は、律法は隠された福音であった。その隠された福音を本当に露あらわに表したのがキリストであった。それだから、私たちはそのキリストにおいて律法の世界に対してもはや律法に縛られない。「律法に縛られない」ということは実は、律法は縛るつもりではなかったんですよ。活かすつもりだった。それを縛るような律法にしてしまったから、

「律法に縛られるな」

とパウロは言っているんだけど、歴史的にはそうなんです。律法は本当は、

「律法を行なうものは生く」

と書いてある。けれども、律法を行なうことを根本的にできないものだから、逆に律法が縛るような律法にしてしまったから事実。それで、「律法に縛られる」とかなんとか言っているんだけど。本当は、律法はパウロがもうひとつ奥でもって、

「律法は聖なるものにして人を活かすはずのものであった」

ということパウロだつてわかっている。

●「からの自由」と「への自由」

それで、私たちはそういう超律法の世界で罪から自由となったとおり、罪からの自由であると同時に、今度は善きことへの自由となった。自由には二つの面がありますから。我々は罪から解放されたというのは十字架で解放されたが、今度は聖霊が来たらば、積極的な自由が出てきた。即ち、聖霊によって私たちは善きことに対して自由に動けるようになってきた。何ですか、それは。これは力があるから。御霊は力を持っている。

真理に対して信念を持つというような、それにはやはり力、その力は聖霊の、キリストの霊が最高の力を持っている。聖霊は最高の力を持っている。腕力ではない。この力は敵を倒さない。敵を救いあげてしまう力です。

「敵を愛せよ」

と言ったって、

「あの野郎は嫌なやつだけれども、まあ仕方がない。キリストが仰つたから、なん



とかして愛そうか」

なんて、それは無理ですよ、そんなことしたつて。嫌な野郎は嫌な野郎でいいですよ。嫌な野郎だが、しかし、私の中に働くこのイエス・キリストのもの凄く愛は、私の嫌な野郎という感情をもうひとつ奥から破つて、そいつを燃やして、そして相手をなんとかして本当の世界に入れてやりましょうという念願。そこから本当に力をもって相手に本当の愛の現象が出てくる。

これが相手を救いあげる力。相手を救いあげる力はキリストがお持ちである。このキリストにすれば、私たちが生れつき持っていないものところに、何だかしらないけれども、その力が出てくるわけですよ。そしてまた、それはうれしいことです。みな本当のことは必ず喜びが伴ってきますよ。なにかあとで後味がわるいなんてものは、それは本当じゃない。みんな後味が非常によくなる。なにも味を味わうためにやっているのではない。あとから後味として出てくるだけ。それが本当の喜びの姿であります。幸福といたつて、幸福を目当ての幸福論はダメですよ。本当のところを、真理を歩いていたら、そこにこぼれてきたものが幸福という境地だったというだけのはなしですよ。

キリストの全きという、実存の最後の総くりのところの、全きというところがその愛のことで、それをまたパウロの書簡を引いて参考に申しあげれば、いくらでもありますけれども、まあそういうことはいちいち今日はいたしません。

●ナポレオン最後の述懐

ヒルティの『病める魂』という本の中に書いてある。

「力、力、力のみである。一切の他のものは我らに何の役に立たんか」

と。ヒルティさんは何の力のことを言おうとしているのか。

「終末に向う歴史は、いやむしろあまりにも文明化されてしまったところの均一の世界にこうした救いを求める叫びは、本当はそついう力をみんな欲している」

と。また、ある別なところでは、

「全ての人は実は愛に飢えている」

とヒルティさんも言ってます。そのとおり。あれは『力の神秘』の中だったかな。

「今や四方から我々の耳に聞こえてくるのであるが、このような最大の力を持ったところの一人の人、即ちナポレオン一世のあまりにも力強い非常に活動的な生涯の終りにおいて、セント・ヘレナにおいて彼は次のようなことを言っている。

『福音というものは神秘的な力を持っていて、これは表現することのできない働きを持っている。』

ナポレオンの言葉ですよ、これ。さすがはやっぱりナポレオンだと私は思いましたね。あるひとつの熱さを持っている。その熱は理性にも訴えるし、また心をも魅するところ



ろのものであって、この福音というものの真理内容をよく考えてみると、それは天国のことを思うときに際して感ずるような感じを持ったものである。福音というものは本ではなくして、活動能力を持ったところの生ける何ものかである。それは一切のものを引き裂いてしまい、福音が伝播しようとするのを遮ろうとする一切のものをぶち破って進むところの力を持っている。私はヨーロッパを席捲したけれども、このナザレのイエスの福音にはとうていかなわぬ。』¹¹

と言って、ナポレオンは述懐した。ナザレのイエスは、ナザレ人はこの英雄ナポレオンにもちろん勝ちます。一切の英雄、豪傑もこのイエスにはかなわぬ。これは神の力です。これは神の霊が宿った人の本当の力。これは、しかしながら、人を倒す力ではない。一切を救いあげていくところの、地の果てまでも世の末までも救いあげていくところの力があります。この力に私たちがあずからないで、何が福音であるか。なにがクリスチャンであるか。思われている世界ではない。本当にこのイエスというひとに表れた、今現に生きてありたもうところのキリストの霊を、天界に在りたもうところのこのキリストの霊を、じかに直接に、垂直に太陽の光を受けるごとくに、もつと素晴らしく、宇宙線が我々を貫いている以上に、キリストの霊の霊線によって貫かれたような、そういう人に私たちがならないで、何が信仰かと。そこに使徒たちの信仰があった。パウロもヨハネもペテロもヤコブもみな、その証言者である。だから、

「この使徒的¹²信交に立ち帰れ」

と叫ぶざるをえないではないですか。

「キリストは語る。かくしてももの世代は血の絆よりも更に緊密な更に深く心こまやかなる絆によって彼に属するのである。キリストの霊によって交わる、血のつながった人たちを誰がこれを切ることができるか。」

と。これはパウロがローマ書8章で絶叫していることです。

「このイエス・キリストの愛から私たちを引き裂くものが天上天下何ものがあるか」

とパウロがローマ書8章の終りの方で絶叫しているのではないですか。パウロの書簡を、研究なんてで読めるものではない。パウロの魂の響きの中に入っていかなければ。

「この彼キリストは愛の炎を灯してくれる。それによって自己愛というもの、何ものよりも私たちには強い自己愛という罪をキリストの愛は砕いてくれる。そして、創造的な業と創造的な言葉をもって、どしどしそれが推進していく。」
というようなことが書いてあります。

「キリストの最大の奇蹟といふものは、この名状すべくもないところの恵みの国そのものが一番最大の、即ち、天国といふものをキリストの霊を受けている人たちの間に現ざることが最大の奇蹟である。」



と言っている。

「彼においてのみ次のことが成功した。即ち、人間の心をこの見えざるところの世界に引き上げて、あらゆる次元的な有限の世界から見えざるところに引き上げてしまふ。かくして、この天と地との間に切ることでできない絆をそこに作り上げるのである。」

と。霊的な結合、霊的な一如の世界に持つていくという。ナポレオンのやつがこういうことを言っている。大したものだ。私はナポレオンの伝記をまだ読みませんが、とにかくヒルティがここに引用しているこの一言だけでも、ナポレオンというやつはやはり敬すべきものを持つている人間だ。あんな戦争したことはひとつもよくはないけれども。最後の瞬間に、ちょうどあの十字架の盗賊が最後の瞬間に、

「私は悪かった。せめても覚えてください」

「よし、おまえは今日、私と一緒にパラダイスにいくぞ」

と。自分をぶちまけた人をキリストは無条件に受けとって、最初に盗賊が天界に入ってしまった。力強い英雄ナポレオンが、

「この福音の聖霊の力、御霊の働いている御言と御業の世界のこの福音の力には、どう

てい及ばない」

と言った。

●私を背負ってくれよ

また、あのズームという人が

「福音は自らの力によって展開していく」

と『教会の歴史』で書いています。そのとおりです。

「たとえ、誰が信じなくても、やがて石が叫ぶぞ」

と。集会の人が何人いようといいですよ。滅つても増しても。出て行くやつは出て行けばいい。入ってくる人は入ってくればいい。私たちはただ真理を伝えていけばいい。本当に体当たりで伝えていく。

「よし、この真理で行きましょう」

というやつとどこまでも一緒に行くこうと思う。人間小池なんか見ているやつは必ず躓きます、そんなことでは。この破れ器を通して現じたもうところのキリストを見ている人は、私が躓いて転んだら、

「よし、先生、ひとつしよつてあげますよ」

と言つて、私を担いで行つてくれるでしょう。「担ぐ」というのは、「先生」といつて勿体ぶることの担ぐではないですよ。私を背負ってくれるんです、私が疲れたら。だけれども、私は割合に疲れないからまだ大丈夫ですが。

それは道徳的実存の方でそのようなことに変わっていきます。今度はキリストは、もう



ひとつの実存面を語っておられる。それはマタイ伝8章、9章です。なにもマタイ伝に限ったことはないけれども、まあマタイ伝でいきましょう。それから、7章にもまだ道德面がありますけれども。

「人を審くな」

という。それから

「叩け」

なんていうのがあります。8章あたりから何が書いてあるかというのと、霊的な御業のことが出ている。

「²視よ、一人の癩病人みもとに來り、拜して言う『主よ、御意ならば、我を

潔くなし給うを得ん』³イエス手をのべ、彼につけて『わが意なり、潔くなれ』

と言い給えば、癩病ただちに潔れり。」(マタイ8:2-3)

イエスが按手したら、癩病人が治ってしまった。

私たちの魂の世界の欠陥、道徳的な魂の世界の病、これを癒して健全な実存へと変えてくださると同時に、今度は私たちの肉体的な欠陥に対しても力を与える。そのことがまた、私たちを通してそのようなことをなしたもう。これが使徒行伝で証しされているところの事態。パウロもヨハネもペテロも自在にその証人であった。御利益を言っているのではない。宗教の世界は、祈りの加持祈祷とか何とかいう、そういった働きをするのも他の宗教だつていくらでもあります。現象面では似ているでしょう。けれども、質がちがうんです。

●御霊の神癒的な徴

イエスがこのようなマタイ伝8章、9章で片っ端からそういったことをなさつて——なにもマタイ伝に限りませんが——これはみな何の徴かしるしと。要するに「徴」「セイメイオン」です。御霊のそういった神癒的な方向に表れているその徴。また、

「五つのパンと二つの魚から五千人の者に与えてなお余った」

なんていう、これは考えられませんですよ。けれども、創造の力の中にはそれがある。あの五千人のことはどの福音書にも出ている。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネに。よほどあれは重大な事実であった。

また、ガリラヤ湖で弟子たちが舟に乗って、もうあわや沈もうとしている嵐の中でキリストは舟板を枕にして眠っている。なんと大胆なひとか。キリストはよつほど疲れているかと。そうじゃないですよ。これは神さまの御腕を枕として寝ているわけです。神の御腕を枕とする。

私たちがもし、

「どうもこの頃眠れません」

なんてのは、神経衰弱でなく信仰衰弱ですね。信仰が衰弱してしまうからそういうことに



なる。キリストに枕して寝れば、どんな問題があろうが、悩みがあろうが、みんなお預けにして、それでもう、

「はい、あなたの御懐みふところに入って寝ます」

と。日本人はこの「懐」と言う。ちょうど、お母さんの懐に赤ん坊が寝るような具合に、キリストの御懐に眠るつもりで寝てくださいよ。そうしたら必ず眠れる。もう熟睡してしまふ。そして、短い時間でパッと起きれる。あるいは、電車の中であろうとどこであろうと、もう睡眠は自由自在です。眠ろうと思えばいつでも眠れる。起きようと思えばいつでも起きられる。

「どうぞ、神さま、明日はひとつ五時に起こしてください」

と。目ざまし時計がなくなつて、大体そのへんに起きる。これは本当ですよ。本当にそれを祈つて寝てごらんさいよ。そういうように自然になつてくるから、だんだん。

「今日はお金が足りない。よし、断食しちまえ」

と。それでもつんだから。水飲んでいれば大丈夫。とにかく、不思議に自在なひとになる、そういうことでもね。それから、まあ私みたいなやつを通して、医者に見離されたような人たちが幾人も助けられてしまうから。キリストの御力が働けば、そういうことになる。受ける方で逆らっていたらダメですよ、霊に逆らっていたら。

イエスもナザレでは、イエスのことをバカにしたり逆らっているやつには、キリストは徴をお顕しにならない。それは物理の世界ではない。霊の世界です。霊の法則の世界は物理法則とはちがうから。

あの中風の者を癒したときにキリストは何と言つたかというところ、

「汝の罪ゆるされたり」

と言われた。あの中風の人間は何か悪いことをして、それで中風になった。道徳的なものが原因になつている。そこで、「汝の罪ゆるされたり」と言われたんです。そういうことが原因となつて肉体的に響くことはいくらでもあるから。まちがっていたら、

「わるかつた」

と平伏するのが一番です。ごまかしてはいかん。何も人に言わなくなつていい。イエス・キリストの前に言う。よく、カトリックでは懺悔僧というのがいて、懺悔を聞いたりなんかするけれども、そんな必要はない。イエス・キリストに直接にする。

とにかくそういうことで、

「幼児わがなこのころ」

というのがそういうのです。あるがまま率直に自分をイエス・キリストに投げ出していく。開けっ放しの人になる。胸襟を開いた人にだんだんなつてくる。人と人との間でも、なにか歯にものがかさまつたような言い方をしたり、

「何をあいつは思っているんだかわからない」



というのは、つきあいにくいですよね。だから、お互いに自分の胸襟を開いていく。実は胸襟を開いていることが一番強いんです。

私みたいなのはおよそ生れつき臆病者だから、なかなか開かない方だったんだけど、開くようになった。なぜ、九州の人が明るいかというと、やっぱり太陽の光が多いから明るくなる。東北は陽が少ないから、どうも内側にこもる人が多いね。だから、東北の人はいよいよ霊的な光を受けないと。九州はまたいよいよ受ければなお結構なことですよ。

●天国人の実存の画面

また、キリストは湖の上を渡ってきたでしょ。前の晩は一晚、イエスは祈っていた。夕方から山に独りこもってしまって、祈り三昧に入った。完全に神の力が来てしまって、もう物理的法則の世界を超えてしまったから、嵐の湖の上を涉ってきた。弟子たちはそれを変化かと、幽霊かと思つて恐れた。幽霊ではない。

「我なり、恐るな。心安かれ」

と。私はあの言葉は大好きです。

「私だよ、恐がることはないよ。安心しろ」

と。私たちがいろんな人生の出来事にぶつかつたときに、このキリストにぶつかつて、そしてキリストの御力にあずからん。

「そうですか、あなたでしたか」

と、ペテロのやつが喜んでしまつて、

「あなたの方へ行かしてください」

と言つた。

「よし、きたれ」

と。そしたら、水の上を渡つたよ、ペテロも。ところが、ちよつと横を見て、風が吹いて波が立っていたものだから、それを恐れたから沈みかかつてしまった。分裂したから。この分裂、恐れは一番禁物です。この分裂、恐れが、しかし、キリストに向かつていけばなくなっていく。ペテロは

「助けて！」

と、SOSをやつたから、

「どうぞ、信仰うすきや」

と。それで連れて行つてまた舟に乗つけて、今度は波を静めてしまった。

「静まれ！」

と。日蓮の波題目というやつもありますけれども。

「南無妙法蓮華経！」

と称えれば——これは本当にそうですよ——それは静かになる。日蓮くらいの坊さんがや



つたんだから、そうなりますよ。だから、昔の一流の坊さんたちの言葉や伝記を読むと、私はそこらの聖書註解なんか読むよりかはるかにためになる。とにかく、仏さんの世界もいつわりはないですから。およそ真理の世界は尊ばなくてはいいかん。

そういった肉体的な力の世界でも自在に私たちを通して、なお人を救いあげていくような働きをなすと同時に、また道徳的実践では、極まるところは愛という言葉をもって言われるところの事態が展開していく。これがこの天国人の実存の両面である。

●道徳的実存

そして、社会人としてこの道徳的実存から、なお社会的道徳の根底にどのようなものがなくてはならないかというこの問題。それから今度は、政治の問題にもだんだんそれは展開してくる。およそ人間の一切の問題に向かって、その根底となるものはこの福音の問題です。福音を直ちに政治に応用するのではない。いかなる政治をなしていくかという主体はどこまでも人間ですから、政治でも経済でも何でも。その主体が変わらなければ、外側の技術、機構の運営がどんなに変わっても決してそれではなくなるものではないことは明々白々である。

日本はいわゆるレジャーブームとか、マイホームだとかいって、チャカチャカしていたら、日本は亡びますぞ。私は日本の姿はなにか亡霊みたいに見えてくる。これは若い人たちが本当に日本というものを憂うならば、この道徳的実存、生活の本当の実存をやっていくその原動力たる福音を受けとらないでは、日本百年の計はならないです。もう仕方がないから、私はなにか書き物で遺したいと思っただけから大いに頑張りたいと思っただけです。すけれども。

内村先生が、

「もうこんな国には愛想をつかしたと、そう言ってくれ」

と言われた気持ちもわかりますよね。それは本当に愛すればこそその捨てざりふなんです。また、藤井先生が、

「日本よ、滅びよ」

なんていう詩を書いってしまった。けれども、この御霊の福音を受けたらば、本当の力を持つているから、この力をもって実践していくところのクリスチャンが現れてこなくては。思われている世界ではない。ただ言われている世界ではない。実存していくところのキリスト教です。

ゲーテが、

「初めに行為あり」

と言った。「初めに言あり」ではないと。行為があつてそれが言に展開していくんだと。それは真理です。ゲーテはその当時のキリスト教に対する批判の気持ちがそこに表れている。



大体、向うの当時の思想家や詩人がキリスト教に飽き足らないのは、当時のキリスト教に對してのあれは反語なんだよね。本当の福音を受けとれば、ゲートルさんだって、ニーチェだって——ニーチェなんかは全然引っくり返したとり方をしてしまった、残念ながら——彼らは本当の御霊の世界に——牧師さんがどうだって、教会がどうだっていいよ——自分たちが本当に聖書とつくんで聖霊の世界に入れば、それは詩人だって思想家だって何だって、素晴らしいことになったはずなんだ。ただ反対ばかりしていたら、ダメですけれども。ゲートルは、反対ばかりではなく、もつと深く彼は普通のクリスチャンよりか福音の世界に入ってます。

●二つなき道

どうぞ、そういうことで、私たちは、この天国人の実存というものがそういうように道徳面に対しても、いわゆる実存面に対しても、また生命の上におきましても働いていく。いつ死んでもいいと同時にまた、

「神の使命のあるところ必ずその使命を果たすまでは私は死ぬわけにいかん」という、我々の生命は使命の生命であって、ただ長生きするための長生きではない。

そういうことで、どうぞ、ひとつ張りをもつて進んでください。知らないまに、「なんだ、少し欠陥があったと思つたら、アレルギーなんてものはどこかへいつてしまった」

なんてね。アレルギーだつて変質しますよ、きつと聖霊で。聖霊のこの新しき生命をいただけば。今の医学なんてものは限界だらけだから。もちろん、私は医学をけなすのではないですよ。医学の人は大いにやってください。限界を超えてください。ノーベル賞でもとってください。けれども、どの世界でも、どの分野でも、進んで限りなき創造的な人になる。悟りではない。創造的な人になる。

神は創造の神である。イエス・キリストも、

「我は今日も明日も次の日も進み行くなり。父と共に働くなり」

と言つておられる。静中の動、動中の静。その呼吸がわかつてくる。どんなに忙しくてもそれでうろたえることがない。楽な気持がそこにある。まあ始末のわるい人になるわけです。

「二つなき道にこの身を棄て小舟、波立たばとて風吹かばとて」

これは西郷南洲の歌です。「二つなき道」という。私たちにとってはこのキリスト道は「二つなき道」であります。キリストは、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言われた。「キリスト教」ではない。「我は道なり」と言われた「キリスト道」です。日本人は道的な民である。茶道、弓道、柔道、剣道というように道の民である。この

「二つなき道にこの身を棄て小舟」



と。この道に自分を投げ捨てるようなわけで、これが「棄て小舟」と言葉をかけたわけだね。
「波立たばとて風吹かばとて」

いつこう差し支えない。波が立とうが、風が吹こうが、いいと。この道に棄て小舟で、波のまにまに風のまにまに進んで行くぞと。私たちも本当に、「二つなき道にこの身を棄て小舟、波立たばとて風吹かばとて」という境地になる。

「わが法は柳の糸の乱れ髪、結つにゆわれず解くにとかれず」

と。これは白隠の先生のそのまた先生の歌だ。キリストのわが法則は、靈法は柳の糸の乱れ髪のように、言うに言われず説くに説かれずという、不思議なものである。この靈法はそのような妙法であると。良寛和尚の境地もそうですよ。

「裏をみせ表をみせて散るもみじ」

という。もみじの散る姿はうらおもて見るがままにと。風が吹くままに、何も種もしかけもありません。私の生活も、在り方もそんなようでしたと。これが良寛さんの歌ですよ。

「盗人の残しおきたる窓の月」

ぬすびと盗人が入ってきて、みんな持つて行つてしまつたが、窓の月だけは残っているなあと。そういう境地は、やはりその道その道で徹した気持を持っていなければ出てこない。

どうぞ、私たち、

「福音を受けとつた」

というならば、もはや七面倒くさいことではありませんよ。一如の妙境からして自由自在な展開をして限らないものとなつていく。これが天国人の実存の姿。つかむにつかまれない。小池というやつはどういうやつか。これは説明できない。皆さん一人ひとり、この

「ゆうにゆわれず、とくにとかれず」

というように、そういう人間になつていく。

「私の正体をつかまえてごらん。わかりませんよ」

というようにことです。写真をとつてみたら、映らなかつたなんて。光が射してしまつてね。そういうような——それは半分冗談で、半分本当ですが——本質的にはそうですよ。写真にまだ映るようではしょうがないんだ、本当はね(笑)。ボーツと映っていたのは、あれは幽霊かと。そうじゃなかつた、キリストが光っていたなんて。冗談ではありますが、とにかく、そういうような、なんだかしらんけれども、

「もうこれしようがありません」

という、皆さんがこの喜びの人にいいよなつててください。そして、本当に人を喜ばす。私は一人のひとが魂を翻して、

「ああこれだ」

と言つて喜ぶ姿を見ることほどうれしいことはないです。おしまい。

